

氷筍集

十月号 2025

投げ上ぐる小さき乳齒や雲の峰	朝田 玲子
窓際の空蟬けふも空を向き	福 のり子
峰雲の破れて遠く雨柱	齋藤 亜矢
一向に鳴らぬ風鈴見に行きぬ	有岡 萃生
夕暮を急ぐ上布や隅田川	小 寫 和
来客へ一枚足りぬ革蒲団	中島 冬子
片蔭や雲の動きを移し出し	田 中 勝
炎天や足場づくりの音止まず	森 壹風
雪溪を口に含みて下山とす	中井 昭雄
天使なら羽根があるはず天瓜粉	片岡 和子
黄揚羽の蔭より出でて蔭に入る	城戸崎雅崇
海水浴の青ぐるぐると絵日記に	佐藤 慎一
塩飴をもう一粒と午下の汗	丹羽 康夫
泡盛や母は料理の隠し味	福地 義雄
氷水ひと月前は昔なり	昌山瑠美子 氷室
梅雨の間や鉢の音に風通り	鳥居 裕子
椅子の背に風の音聞く夕涼み	寺川 貴也
出迎への足音に揺れ蚊遣香	宮坂 美緒

海へ降り潮となりゆく緑雨かな	加藤 広文
龍頭へ風を孕みて鉾進む	細見 昌代
屋内にても足止め日雷	加藤 剛
からつぽの空からつぽの燕の巢	鈴木 大輔
空蟬を子は腕につけ宿題す	鈴木 さやか
雲母坂へ赤山苦行木下闇	片山 旭星
兄とゐて鰻を狙ふ夏の川	加藤 節江
新盆や形見は去年製の機器	斎藤 よし子
臥す人の汗ばむ背ナを拭ふ二時	秋山 陽子
夕立の迫る速さよ汽車の窓	石田 信之
喧騒の鎮もる放課合歓の花	望月 有子
銀河鉄道乗り遅れたり星月夜	坂 利美
一揃ひの小さき着替を日向水	大畑 照子
帰省子ら円陣組んで談義中	田辺 美千代
船上へ御迎人形いまはせず	杉浦 康子
いさましき祭だいこに日の暮れて	米倉 大司
片蔭をましぐらに行く猫のゐて	小川 妙子
八十年被爆樹見上げ原爆忌	幸城 麗子
夕立や雨雲リーダー睨みをり	大村 誠

氷 筍 集

九月号 2025

螢火の描く曼荼羅闇深し

福 のり子

尾根渡る風やかすかに青葉木菟

齋藤 亜矢

竿先をじつと見守る小鷺ゐて

朝田 玲子

緑蔭を抜け外宮なる砂利の道

谷口 文子

あめんぼうひとつ動けばひとつ去り

有岡 萃生

手を振れば人の遠さの青田かな

鈴木 大輔

四十階ホテルの窓の明易し

小 瀧 和

すこやかなる極太文字の夏見舞

津嘉山 典

校門へ移動図書館風薫る

片山 旭星

越前紙捲く手重たき溽暑かな

牧田満知子

乳母車の定員五名梅雨晴間

石原ゆき子

コーランに目覚めトルコの初夏の旅

植田 清子

あれこれと介護の夜なり明易し

大野千鶴子

歩み入る菖蒲田といふ別世界

城戸崎雅崇

講談を聴き一献の鱧料理

佐藤 慎一

空蟬の涙と思ふ湿りかな

友永基美子

万緑のなかの一本伐り倒す

中井 昭雄

涼しさや沖縄シャツのかりゆしに

福地 芳雄

七夕の笹伐りに来る保護者会	藤本 隆子
いつぞやの泣き虫母となりて夏	福田 将矢
森の朝破れ団扇に火を熾す	大石 高典
地下出でて地上は梅雨の走り雨	宮坂 美緒
若竹のしなる光の透けてあり	寺川 貴也
磨る墨の粘りの強し梅の雨	昌山 瑠美子
夾竹桃数本残り校舎跡	鳥居 裕子
山よりの風に応へて江戸風鈴	中村 淳子
時鳥けふここまでと畑仕事	柳堀 悦子
行く春や九種に増えし飲み薬	加藤 広文
ねんごろに一夜を畳む蚊帳かな	伊東 弥生
三線の音色涼やか那覇の宵	望月 有子
水無月の茶会や菓子の水無月と	平井 彰子
ゆすらの実やほほばりし子も母となり	清水 淑江
みんなが鳴いて窯場の昼休	加藤 節江
遠雷や締切迫る午後なかば	古閑 裕海
暗きうちすること決めて明易し	坂 利美
万緑や空押し上げて深呼吸	大畑 照子
寢室の網戸へ風の旅情かな	林 剛

氷 筍 集

八月号 2025

崩るるもぼうたんはなほ牡丹かな	福 のり子
ためらはず子は先を行く八重葎	有岡 萃生
電線の鴉片目に賀茂祭	齋藤 亜矢
目薬にあふぎゐるさき樟若葉	朝田 玲子
椰子の木の下へ広がる田植かな	小 寫 和
太陽をはたくがごとき鯉幟	大石 高典
小窓より吹く風ふつと草いきれ	谷口 文子
風光る羽水平に飛翔せり	加藤 剛
先々へ佳きこと思ふ新茶かな	伊東 弥生
仕事場の夢洲遠し夏に入る	佐藤 慎一
青東風や麓ざわめく妙義山	立石 律子
空蟬や生き残り居て爪を切る	友永基美子
薫風や磨きて遺す夫の靴	前田 鈴子
牛車来る道に草の香賀茂祭	昌山 瑠美子
瀬戸内へ釣船すつと夏未明	宮坂 美緒
鮎の香を残して生簀空べとなり	鳥居 裕子
一瞬の耀き朝の金鳳花	寺川 貴也
色褪せぬ学徒の遺作風光る	石上 敦子

風薫る比叡を望み鞍馬寺	片山 旭星
持鈴追ふ持鈴の音いろ残る花	田中 白秋
草取や雨の匂ひの残りをり	中村 淳子
母の前へ父の供ふるさくらんぼ	田中 勝
島の風丸呑みにして鯉幟	片岡 和子
春逝くと智恵子の空を探しみて	高松 房子
いつとなく離ればなれの潮干狩	城戸崎雅崇
宮出しの雄叫び五月晴を呼ぶ	羽尾 芳樹
龍になる夢みてをりぬこひのぼり	古閑 裕海
カーネーション手すりの増えし母の家	大畑 照子
水の恵みに平安よりのかきつばた	相原 弘子
新緑の加茂街道を牛車行く	石原ゆき子
ビロードめく産毛に温み袋角	大野千鶴子
雨あがり鳴鑼響く神輿かな	小川 豊子
新社員名刺の名前繰り返し	林 剛
肩の荷の重さに重き神輿かな	細見 昌代
山裾にすつくと立ちし虹の足	山中伊蘭子
永き日に見る八尺の蛇行剣	矢野 裕俊
梅雨を待つ砂防工事の雨量計	大村 誠

氷筍集

七月号 2025

下萌や蹄の音のやはらかし	朝田 玲子
古草のしげりに深き水たまり	加藤 剛
水底の見たるけふの楊の芽	鈴木 大輔
春光や家紋のしるき城の石	福江ちえり
茅ぐろの春田に残る久万の郷	牧田満知子
鑿音の鋭し丸ろし花曇	森 壹風
しまなみの海光るとき藤の花	田中 勝
少年のサッカー留学風光る	植田 清子
親切にさるる齡や花の雨	城戸崎雅崇
春雷に調子落として反抗期	友永基美子
樹木葬の友聞ゆるか百千鳥	福 のり子
ジェノベーゼ頬ばるときの春動く	宮坂 美緒
泳ぎつぷり褒められてをり鯉のぼり	伊東 弥生
札所まで伴やささらの遍路杖	田中 白秋
花見人去れば人家のぼつりぼつり	寺川 貴也
お手製の床几にどかと桜守	有岡 萃生
春祭いはけなき子に天狗面	小西 恭子
行く春や番号抜けし出欠簿	丹羽 康夫

春愁を文殊菩薩に預けたり	細見 昌代
卯木咲く一乗谷は雨催ひ	石上 敦子
日時計の針一本や春の果	加藤 広文
しなやかな強さありけり春の風	昌山 瑠美子
畦道の雲雀ひとこゑ大空へ	片山 旭星
つくしんぼ朝の散歩の手に溢れ	平井 彰子
よそゆきに見ゆる上野の桜かな	斎藤 よし子
窓辺にて二羽の囀る日曜日	小林 きみ子
胡瓜草千切り夏の香身近にす	望月 有子
春風や湿りおびたる象の鼻	小堀 尚美
軒先へ燕のかよふ宿場町	中村 淳子
たんぽぽへ放棄畑を貸しにけり	前田 鈴子
みすずの詩聴きゐるやうに春の海	相原 弘子
カンテラに集まるシラス漁眺め	石原 ゆき子
出石城守る兵士か蝸牛	國兼 弓華
三鬼忌を忘れてゐたり春寒し	山中 伊蘭子
被爆地の川に流るる花筏	小川 妙子
電車降りるとき小銭鳴り春の服	大村 誠
津波の碑訪ねし浜に桜散る	杉本 伸一

氷 筍 集

六月号 2025

釣船の群なす湾や彼岸潮

大石 高典

二度寝して言ひ訳の夢四月馬鹿

小 崙 和

朝寝して朝寝を知らぬ妣の夢

伊東 弥生

蛇穴を出て地雷なき日本かな

片岡 和子

炊飯器の湯気に朝日や新社員

碓氷 芳雄

クラクション鳴らす別れや春の宵

片山 旭星

啓蟄や何やら出でし穴二つ

田崎セイ子

出来ぬこと増えゆく日々や蝶生る

友永基美子

啓蟄や飼育の箱に動くもの

藤本 隆子

芝居の後みな傘ささぬ春の雨

鳥居 裕子

朝にはじめ夕べに了る雛納

朝田 玲子

鶏鳴の遠き一声冬終る

加藤 広文

冬の雨善根宿を一人立ち

田中 白秋

つちふるや夕日は海へ帰るころ

鈴木 大輔

良き日射し風が持ち込む余寒かな

松村 滋子

おぼろ夜や目覚めてあれはきつと嘘

坂岡 隆司

桃の日や妻を手伝ふ子の料理

寺川 貴也

啓蟄や雀のこゑの近くなり

福江ちえり

軽量のスコップ重き春の雪	森川恵美子
午後二時四十六分黙禱の春時雨	高松 房子
窯仕事いまだ終はらぬ春の宵	加藤 節江
三月や税申告書まだ手書	城戸崎雅崇
街愛づること人の群れ花疲れ	木村 英昭
雁風呂や浜に煙の立つといふ	古閑 裕海
剪定の梯子に庭師昼休	秋山 陽子
白梅の花に夜来の雨光る	石田 信之
閏日の夫に繰り上げ誕生日	井本 陽子
春雷の一打東へ通り過ぐ	小林きみ子
日を受けて残雪の波うす青し	小堀 恭子
鳥帰る田水ひつそり日をたたへ	小堀 尚美
今日会うて明日は仲間や水温む	田辺美千代
摘みはじめ止まらぬことよ露の臺	中村 淳子
里山や夕日に光るなごり雪	山田ミチ子
春告ぐるまつぼつくりの落つる音	相原 弘子
霾やアッサム茶葉が湯に踊る	細見 昌代
淡雪や旅の始まる電車待ち	杉浦 康子
火は猛り走りとよもす修二会かな	矢野 裕俊
風光る竹のゆらぎのこゑとなり	小川 妙子

氷 筍 集

五月号 2025

オリオンの傾き深く明けにけり	齋藤 亜矢
ベランダの干物揺さぶる空つ風	大石 高典
登校の杞憂やバレンタインの灯	鈴木 大輔
初明り阿修羅の指の影動き	田中 白秋
春の雪傘を逆さにして受くる	加藤 剛
春寒を言うて大人の座に入りぬ	有岡 萃生
辛夷咲く波の耀き増して来し	片岡 和子
青空にかざせば青き氷かな	伊東 弥生
春の雪猫にあらざる跡のあり	中島 冬子
三桎のひかへめの黄の豊かなる	城戸崎雅崇
豚汁のおかはり二杯受験生	立石 律子
着信音あと追ひかけて虎落笛	加藤 広文
水遣れば土の香の立つクロッカス	小 小 和
青空へかける言葉よ息白し	宮坂 美緒
寝返りの背に猫の手や月朧	河村 純子
曇天の彩りとなり寒椿	寺川 貴也
春泥や道に迷ひし若き頃	坂岡 隆司
春立ちぬ夕闇のいろ新しく	昌山瑠美子

田遊びの餅にて作る鎌と鋤	丹羽 康夫
草萌ゆる本所深川路地の鉢	柳堀 悦子
閏年の除夜や除夜香十三種	平井 彰子
思ひ遣る故郷の豪雪つづく報	羽尾 芳樹
春近し校門前に佇む子	入江 祐子
道沿ひに誰が植ゑたるか水仙花	小林きみ子
雪しまくなり煽る風唸る風	坂 利美
夕映に後ろ押しされて蓬摘む	大畑 照子
春浅し駅片隅の貸文庫	小堀 恭子
たんぽぽの黄に在来種外来種	前田 鈴子
大雪を能登に降らせて晴れてくる	石原ゆき子
鼓の音響く西陣雛祭	國兼 弓華
覇気の消えたり夕方の雪だるま	佐藤 慎一
春の炉や美山の薪をくべ足して	藤本 隆子
ルージュの蓋そつと閉ぢたり花ミモザ	細見 昌代
悴みてをれば小さくなりし母	杉浦 康子
赤い実を残して消えし雪うさぎ	土居 郁雄
道真の焦がれし梅の香はかくや	矢野 裕俊
手袋の重さことさら春近し	米倉 大司
妖精の棲む香りかと水仙花	田崎セイ子

氷筍集

四月号 2025

口能登の半旗掲ぐる初御空	福江ちえり
いそいそと寄り道けふも冬菜畑	福のり子
評伝の片手に重し枯芙蓉	有岡 萃生
カーテンを閉め直す夜の寒さかな	加藤 剛
初富士へ遠投の竿振りかぶり	小 寫 和
万両の赤や離宮の空広し	田 中 白 秋
翁飾そこに年明け能舞台	河 村 純 子
鯛焼や散歩がてらに寄る屋台	中 井 昭 雄
革靴を磨けば春は遠からじ	鈴 木 大 輔
冬の日の温もりためて石の橋	田 崎 セ イ 子
お正月を好きになれぬと一人つ子	中 島 冬 子
まんまんさんあんぷくぷくと初参	前 田 鈴 子
枯芝の光に埋もれ猫は野良	朝 田 玲 子
初春やペン先磨き母へ文	鳥 居 裕 子
波之上と名のつく宮へ初詣	福 田 将 矢
初風呂や下駄箱の錠響き開く	田 中 白 秋
牡蠣小屋に持参のバター香り立つ	田 中 勝
母さんに問ひつつマフラー編む子かな	西 澤 勝

百十円に切手を合せ福寿草	森川恵美子
病院の寒灯ひとつ夫の窓	高松 房子
藁の蛇飾る松過ぎ六義園	城戸崎雅崇
初場所やいよよ華やぐ溜席	斎藤よし子
元朝も待つ人のをり介護の手	秋山 陽子
一字目の筆圧強し初日記	石田 信之
雪を掻く出掛ける用はなけれども	岩見三七夫
それぞれが家族の戻る五日かな	坂 利美
半日は挨拶回り初仕事	大畑 照子
雪起しわつと駆け出す登校児	小堀 恭子
寒の土掘ればぬくみの仄かなり	小堀 尚美
ストーブに預けし煮物ふくふくと	中村 淳子
刈り込みし庭のうつすら初景色	山田ミチ子
湖の釣り一艘の冬深し	荒木 昭代
松の辺を白鷺翔る寒の入	國兼 弓華
湖北よりの客車は雪を乗せて来て	林 剛
中指の切り傷ひと小正月	細見 昌代
初春やいつもの道の新しき	杉浦 康子
北風の訓練重き消火栓	大村 誠
左に杖右手に筆や年の酒	玉元 庄弘

氷筍集

二月号 2025

ため息の一つまじりし夜露かな

福のり子

窓開けて台北の冬匂ひ立つ

小寫 和

まつすぐに墨を吹き上げ寒の烏賊

大石 高典

菰巻くや幹をひと撫でする庭師

中島 冬子

十秒の不在か在かかいつぶり

齋藤 亜矢

枯蔓の取り払はれて売家札

朝田 玲子

接待の飴玉まろし冬麗ら

田中 白秋

オリオンの夜を煌々と医療の灯

福江ちえり

病棟はゆふやみのいろ冬木立

牧田満知子

柿の実の消えたり熊の爪の跡

森川恵美子

猫の影が障子を来るよ冬うらら

荒木 昭代

雪積り富士は正しく富士となり

伊東 弥生

園児らの秋蚕の繭の十個ほど

立石 律子

冬めくや生きもののごと竹を編む

谷口 文子

初めてのボーナスに買ふ背広かな

福地 義雄

ストーブの薪運び込む日課増え

藤本 隆子

三方五湖の辺や姑の凝鮎

前田 鈴子

選ばれし冬至南瓜ぞ納屋の隅	森	幸子
低吟の路地を過ぎゆく寒夜かな	加藤	広文
火の番の声一寸のずれもなく	加藤	剛
地のこゑの鎮もる銀杏落葉かな	鈴木	大輔
年の瀬や母のつまづく車止	有岡	萃生
長男は餅のあふるる雑煮椀	國兼	弓華
千両の赤い実なれど仏花とす	原	順子
暮れ満つる窓の外なほ寒茜	寺川	貴也
空近き山の出湯は雪催	石上	敦子
溶岩の中よりひびく虫の声	西澤	勝
江戸つ子に合せし味の煮大根	柳堀	悦子
いふなれば日陰の似合ふ実千両	城戸崎	雅崇
スーツケース我先に往く年の暮	木村	英昭
忘年会時間厳守に一丁締	入江	祐子
畑に出てふたりが対の冬帽子	小堀	恭子
数へ日といふ一日の始まりぬ	中村	淳子
小白鳥の旅の途次なり群大さ	山口	容子
夜も力抜かぬ風あり冬銀河	片岡	和子
ふるさとへさそふ訛や年の暮	小川	妙子
誰もたれも着ぶくれてゐる影黒し	大村	誠

氷筍集

二月号 2025

小灯に残る一章残る虫

朝田 玲子

窓際の瓶に日射しの秋の色

齋藤 亜矢

おはなしに声色遣ふ寒夜かな

有岡 萃生

小石にも地球の歴史冬日向

鈴木 大輔

落葉踏む地球の向かう落葉踏む

河村 純子

神社みな海へ向く町乾風吹く

片岡 和子

かまど猫いつも主を見張りをる

中井 昭雄

雪ばんば伏し目の吾について来し

伊東 弥生

秋灯し母の教へは今も尚

植田 清子

枝先のかすかに震へ鵲の贅

大野千鶴子

小春日や鱒は釣られてすぐ焼かれ

立石 律子

白足袋の家族分あり古簞笥

森 幸子

花野より呼ぶ声のあり誰も居ず

加藤 広文

木犀や犀星歩きたる田端

宮坂 美緒

カフェラテの泡の消えゆく初時雨

田中 白秋

車座は男子学生芋煮鍋

大石 高典

えんとつがなくともサンタクロースの来 山本 京子

襖替へ轅合はせし御所車	小堀 恭子
山形の盆地や冬の靄に浮く	田中 勝
俊太郎サインの絵本冬茜	佐藤 慎一
体操は日課となりて冬の朝	加藤 節江
静けさの沁みゐるを聴く小夜時雨	原 順子
ほろ酔ひや部下を励ます冬銀河	石田 信之
一乗谷を木枯の駆け走りたる	井本 陽子
木枯びゆうびゆう涙目に目薬	入江 祐子
こんな仔と暮したき夜の初時雨	住田 祥子
ストーブに煮物まかせて読書かな	大畑 照子
炉開を祝ふ松風ありにけり	相原 弘子
同じ色二つとはなき柿落葉	小川 豊子
三井寺の鐘澄む日なり響くなり	國兼 弓華
醍醐寺や銀杏色づく空となり	幡山 杏
虫の音や汝の待つ家の窓明り	林 剛
木枯しの夜半とて酒の爛をつけ	矢野 裕俊
秋空へ波打ち響くつづみ岩	大村 誠
殉教の原の城跡石路の花	杉本 伸一
渡り鳥われはこの地に生きてをり	田崎セイ子
霜月や解し乾かし鉢の土	玉元 庄弘

氷筍集

一月号 2025

秋草に分け入る馬の背の揺るる

齋藤 亜矢

ふるふると萩の実の揺れ嘴の揺れ

朝田 玲子

閉店の奥にひとつの灯の夜長

有岡 萃生

札所までつれなき雨や曼珠沙華

田中 白秋

海峡の嗚咽めくなり雁渡し

片岡 和子

影踏みに大人が興じ後の月

福江ちえり

十月の十月桜会ひ得たり

城戸崎雅崇

秋の蚊に献血と洒落見てゐるも

友永基美子

秋深し昔登りし木を撫でて

福地 義雄

弱法師杖の先なる虫の闇

河村 純子

友の子を背負ふぬくもり秋高し

宮坂 美緒

剪られたる木口明るき秋日和

鈴木 大輔

灯を消して明日は離郷の虫の闇

加藤 広文

色変へぬ松や鉄路の延びてをり

加藤 剛

傷つきし林檎やタルトタン焼く

宮坂 千種

大潮の波のたゆらに秋の風

幸城 麗子

新発意も作務衣着せられ木の葉掃く

土居 郁雄

渡り鳥振り返ることなかりけり	古閑 裕海
霧去るを待つてゐる間の足湯かな	西澤 勝
禅寺へ道ふり分けて草紅葉	高橋 房子
素数発見四千万桁星月夜	木村 英昭
羅の尼僧ふはりと茶を運ぶ	世古 一穂
横浜港異国の香る秋の風	野村 幸江
障子貼る今日より新たなる日和	森 裕子
天翔る竜の如きや秋の雲	小長井 敬
石垣の崩れに滲む秋の雨	坂 利美
虫時雨外灯あはき勝手口	大畑 照子
天空に山を浮かせて朝の霧	小西 恭子
指先に洩光らせて柿を剥く	小西 尚美
風来れば風と遊ぶよねこじやらし	中村 淳子
久し振りに浸かる湯船や蚊の名残	齋藤 耐
昼寝しばし里に居たれば永遠のごと	林 剛
秋澄むや聞香の墨する音も	藤木千恵美
米櫃へ音のよろしき今年米	山本 京子
天高し頂はなほ天高し	寺川 貴也
海べりと山路を行き来厄落し	杜 博之
街路灯かすむあたりや虫の声	大村 誠